九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『資本論』の沙翁引用 ： 日本人研究者の優位性

福留, 久大
九州大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/4377821

出版情報：經濟學研究. 87 (5/6), pp.95-115, 2021-03-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

（研究ノート）

『資本論』の沙翁引用

── 日本人研究者の優位性 ──

福　留　久　大

（1）英国人のマルクス評価
（2）エドワード六世一年法
（3）翻訳という苦役の陥穽
（4）ドッグベリーの顛倒性
（5）クイックリーの寡婦性

英国人のマルクス評価

（1）一九九九年の人気投票

英国放送協会（BBC-British Broadcasting Corporation）は、2000年を１年後に控えた1999年１月から「千年紀記念番組」として各分野別に視聴者による偉人人気投票を実施した。１月に発明家（Greatest Inventor）、２月に作家（Greatest Writer）、３月に画家（Greatest Artist）、４月に作曲家（Greatest Composer）、５月に政治指導者（Greatest World Leader）、６月に俳優（Greatest Actor of stage and screen）、７月に運動選手（Greatest Sportsperson）、８月に喜劇人（Funniest Person）、９月に思想家（Greatest Thinker）、10月に探検家（Greatest Explorer）、11月に最大の女性偉人（Greatest Woman）、12月に最大の男性偉人（Greatest Man）という配列だった。各月にその分野の専門家二人が10名を指名し、それを参考に数千人規模の視聴者が投票する形式である[1)]。

９月の思想家部門を見ると、二人の現存哲学者エドワード・デ・ボノ（Edward De Bono）とロジャー・スクルートン（Roger Scruton）が首位に推薦したのは、19～20世紀の米国人哲学者ウイリアム・ジェイムズと13世紀の神学者トマス・アクィナスだった。一般視聴者の投票結果は、次の通りである。①マルクス（Karl Marx）、②アインシュタイン（Albert Einstein）、③ニュートン（Sir Isaac Newton）、④ダーウィン（Charles Darwin）、⑤アクィナス（St Thomas Aquinas）、⑥ホーキング（Stephen Hawking）、⑦カント（Immanuel Kant）、⑧デカルト（Rene Descartes）、⑨マックスウェル（James Clerk Maxwell）、⑩ニーチェ（Friedrich Nietzche）。アクィナスは５位に喰い込んでいるが、ジェイムズ（William James）は10位以内に残れなかった。

マルクスがどのくらいの票を集めて首位を占めたのかはわからない。BBC ニュースは、次のように

1）BBC News Frontpage, Into 2000.

報じている。「革命家にして著述家のカール・マルクスがBBCニュース・オンライン投票の千年紀記念番組『最高の思想家』部門で第１位に立った。この19世紀の著述家は９月の投票で明確な差を付けて首位を占めた。９月の大半の時期に首位を走っていたアルバート・アインシュタインは２位の座に押し戻されてしまった」。(Revolutionary writer Karl Marx has topped a BBC News Online poll to find the greatest thinker of the millennium. The nineteenth century writer won September's vote with clear margin, pushing Albert Einstein, who had led for most of the month, into second place.)[2)]。

因みに、２月の作家部門を見ると、二人の専門家が第一人者に指名したのは、ダンテ（Dante Alighieri）とシェイクスピア（William Shakespeare）だった。一般視聴者の投票結果は、①シェイクスピア、②ジェーン・オースティン（Jane Austen）③ジョージ・オーウェル（George Orwell）④チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）と英国勢が上位を独占していて、ダンテは10位以内に入れなかった[3)]。

(2) 二〇〇五年の人気投票

英国放送協会は、いま一度、マルクスに高い評価を与える一般視聴者投票を企画している。Radio 4の「私たちの時間（In Our Time)」番組で、「視聴者の投票によって選出された最も有名で最も尊敬され影響力のある20名の哲学者」(Out of a shortlist of the best known, most respected and influencial philosophical thinkers, nominated by the In Our Time audience）について、夫々の哲学者の思想の概要と専門家による推薦の辞を準備し公表した後、2005年６月６日から７月７日に掛けて、決選投票が実施された。選出された20名の哲学者は、以下の通りだった。St. Thomas Aquinas; Aristotle; Rene Descartes; Epicurus; Martin Heidegger; Thomas Hobbes; David Hume; Immanuel Kant; Søren Kierkegaar; Karl Marx; John Stuart Mill; Friedrich Nietzsche; Plato; Karl Popper; Bertrand Russel; Jean-Paul Sartre; Arthur Schopenhauer; Socrates; Baruch Spinoza; Ludwig Wittgenstein.

決選投票の結果、10位までは下表の如くに決まった。「マルクスが、BBC Radio 4の視聴者によって、史上最高の哲学者に選ばれた」(Karl Marx has been voted the Greatest Philosopher of all time by BBC Radio4 listeners）こと、「30,000票が投じられて、その28％という驚くべき高得票で、マルクスが抜群の勝利を収めた」(With an astonishing 28 per cent of the 30,000 votes cast, Marx was the clear winner.）ことが注目された[4)]。

Nominee	% Accepted votes
① Marx	27.93%
② Hume	12.67
③ Wittgenstein	6.80
④ Nietzsche	6.49
⑤ Plato	5.65

2）BBC News, October 1, 1999.
3）BBC News, March 1, 1999.
4）BBC News, July 13, 2005.

⑥ Kant　5.61
⑦ Aquinas　4.83
⑧ Socrates　4.82
⑨ Aristotle　4.52
⑩ Popper　4.20

(3) マルクスの人気の背景

マルクスは、1999年の投票では２位のアインシュタインを大きく引き離して首位、2005年の投票では２位のヒュームの２倍以上の得票で首位の座を占めた。その理由の一つとして、マルクスが1849年に亡命者としてロンドンに移住し、1883年の死に至るまで34年間ロンドンで生活したことが挙げられる。ハイゲイト墓地（Higate Cemetary）におけるマルクス本来の墓と後年建立されたマルクス石像とに代表される因みの遺跡がロンドンの諸所に残されている。ロンドンでのマルクスの生活と活動を番組として放送し、その後に書籍化した『マルクス・イン・ロンドン』（*Marx in London: An Illustrated Guide,* by Assa Briggs）のような案内書も存在する[5)]。

マルクスの人気のいま一つの理由として、彼の著作を挙げることができる。有名度で言えばエンゲルスとの共著『共産党宣言』、内容の偉容で言えば主著『資本論』、その他に多数の著作物をマルクスは残した。それらの著作物が英語に翻訳され英語版として刊行される。あるいは、『簡略版資本論』のように諸著作から抜粋された文集ないし読本の類が何種類も編集されている。こうしたマルクスの著作が書店や図書館の書棚に並ぶことによって、英国人は、マルクスをアインシュタインやヒュームに比較して遥かに身近な存在と感じることができる。マルクスの著作を手にして、雄渾な筆致で綴られる鋭角的な論弁に魅せられない人は稀だろう。

エドワード六世一年法

(1) 英語国民の強みと弱み

マルクスに限らず古今東西の思想家哲学者の著作に容易に接することができるのは、最強の通用力を有する英語の世界の人々の長所である。と同時に、英語の通用力の強さは、一般英語国民に英語への依存心を高める反面において他国言語への関心を低めるという弱点を齎すことにもなっている。筆者は、以下に『資本論』の英語翻訳書を材料として、その弱点に起因する誤訳例を幾つか指摘する。そういう指摘が筆者に可能であるのは、翻訳文化・雑種文化のなかで生涯を過ごす日本人として、英語ほどではないとしても独逸語など他国言語にも関心を払わざるを得ないからである。そういう事情のうちに、〈『資本論』の沙翁引用〉を検討する際に、日本人研究者が有する優位性・有利性を認めることができる、と筆者は考えている。

5）Assa Briggs：*Marx in London: An Illustrated Guide,* British Broadcasting Corporation, 1982.　邦訳、大内秀明・監修、小林健人・翻訳、『マルクス・イン・ロンドン』社会思想社、1983年刊。

(2) マルクスの独逸語翻訳

『資本論』第一巻第二四章「いわゆる原始的蓄積」第二節「農村住民からの土地の収奪」で、無産者創出過程の基礎として、牧羊囲い込みと農民保有地収奪が強調され、封建家臣団の解体、教会領や国有地の横領などが活写される。それを受けた第三節「15世紀末以後の被収奪者に対する血の立法、労賃引き下げのための諸法律」において、「封建家臣団の解体や継続的な暴力的な土地収奪によって追い払われた人々は」「群をなして乞食になり、盗賊になり、浮浪人になった」ので、「15世紀末と16世紀を通じて、西欧全体に亘って浮浪に対する血の立法が行われた」として、ヘンリー七世からエリザベス一世に至るチューダー朝の残虐立法が例示される[6)]。これらの例示はそのほとんどが、後述の通り、イーデン『貧民の状態』の叙述の独逸語翻訳である。

その一つ、エドワード六世治世第一年の法規について、マルクスは、次のように語り始める。「エドワード六世、彼の統治第一年たる1547年の一条例の規定によれば、労働することを拒む者は、彼を怠け者だと告発した人の奴隷として宣告される。主人はパンと水と、薄い飲み物と、適当と思うような屑肉とをもって、奴隷を養うべきである。彼は、鞭と鎖とにより、奴隷にどんな厭な労働でもさせる権利を有する。奴隷が逃亡14日に及べば終身奴隷の宣告を受けて、額または頬にＳの字を烙印され、三たび逃亡すれば反逆者として死刑に処せられる」。

Edward VI. : Ein Statut aus seinen ersten Regierungsjahr, 1547, verordnet, daß, wenn jemand zu arbeiten weigert, soll er als Sklave der Person zugeurteilt werden, die ihn als Müßiggänger denunziert hat. Der Meister soll seinen Sklaven mit Brot und Wasser nähren, schwachem Getränk und solchen Fleischabfällen, wie ihm passend dünkt. Er hat das Recht, ihn zu jeder auch noch so eklen Arbeit durch Auspeitschung und Ankettung zu treiben. Wenn sich der Sklave für 14 tage entfernt, ist er zur Sklaverei auf Lebenszeit verurteilt und soll auf Stirn oder Backen mit dem Buchstaben S gebrantmarkt, wenn er zum drittenmal fortläuft, als Staatsverräter hingerichtet werden. [7)]

封建制下の農村で共同体規制に即して生活し労働してきた人間を、資本制下の雇主の要求に応じて労働する人間に馴致し陶冶する過程において、雇主の下から２週間以上逃亡した無産者は連れ戻された後、「額または頬に」（auf Stirn oder Backen）Ｓの字を烙印されるという規定である。烙印を押される場所が「額または頬に」と正しく独逸語訳されていることに注目しておきたい。

(3) 原典としてのイーデン

これら一連の残虐立法を巡る叙述は、マルクス独自の作成物ではなくて、イーデン『貧民の状態』

6）Karl Marx. *Das Kapital. Kritik der politischen ökonomie*. Erster Band.［*Karl Marx-Friedrich Engels Werke.* Band 23. Dietz Verlag Berlin. 1962. 18.Auflage 1993.］S.761-764. 岡崎次郎訳『資本論』国民文庫、第３分冊、392～396頁。以下では、（S.761-764: 3-392～396頁）の形式で表示する。訳文は、適宜改変されている。この例に逸れる場合は、その都度明記する。

7）*Das Kapital*, Erster Band. a. a. O., S.763.『資本論』長谷部文雄訳、青木文庫版、第４分冊、1952年、1122頁、ただし「額または頬に」部分は、長谷部訳では「額または背に」である。マルクス生前に刊行された初版、再版では、下線部分が die er と記されている。

からの訳出物である。前述のエドワード六世第一年の法規については、『貧民の状態』の次の部分が源泉となっている。

「それゆえに法令で次の如く定められた。労働可能であるのに労働を拒み３日間怠惰に過ごした者は、男であれ女であれ、胸に灼熱の鉄でＶの字を烙印され、彼を怠け者だと告発した人の２年間にわたる奴隷として宣告される。主人は、パンと水と少量の飲み物と適当と思うような屑肉とをもって奴隷を養うべきこと、殴打と鎖その他の方法とにより、どんな厭な労働であれ、主人がさせたい仕事をさせるべきであることが命令された。法令にはさらに次のことが付け加えられている。奴隷が主人の下から逃亡14日に及べば、終身奴隷の宣告を受けて、額または頬にＳの字を烙印される。また奴隷が二度目に逃亡して、確実な証人２人によって有罪を認定されれば、反逆者として指定され、他の反逆者と同様に死刑に処せられる」。

（It was therefore enacted, “That if any man, or woman, able to work, should refuse to labour, and live idly for three days, that he or she should be branded with a red-hot iron on the breast with the letter V, and should be adjudged the slaves, for two years, of any person who should inform against such idler. And the master was directed to feed his slave with bread and water, or small drink, and such refuse meat as he should think proper; and to cause his slave to work, by beating, chaining, or otherwise, in such work and labour, (*how vile soever it be*,) as he should put him unto:” and the statute adds, that “if he runs away from his master for the space of 14 days, he shall become *his slave for life*, after being branded on the forehead, or cheek, with the letter S; and if he runs away a second time, and shall be convicted thereof by two sufficient witnesses, he shall be taken as a felon, and suffer *pains of death*, as other felons ought to do.”）[8),9)]

源泉となったイーデンの文章とそれを翻訳したマルクスの文章を比較すると、マルクスが幾つかの部分を省略していること、イーデンで「二度目」となっている部分がマルクスでは「三度目」となっていることなど、細かい差異の存在が判明する。しかしながら、大筋において同様の文脈であり、特

8）Sir Frederic Morton Eden. *The State of the Poor, an History of the Labouring Classes in England, from the Conquest to the Present Period,* London, 1797. p.101.

9）「サー・F・M・イーデンは、アダム・アスミスの弟子のなかで18世紀に何か有意義な仕事をしたただ一人の人である」（S.644：3－194頁）と、マルクスはイーデンを高く評価している。そのうえで、イーデン『貧民の状態』から長短幾つもの引用を行っている。第二四章「いわゆる原始的蓄積」についてみても、その第二節「農村住民からの土地の収奪」や第五節「産業資本家の生成」において引用が行われている。第三節「一五世紀末以後の被収奪者に対する血の立法、労賃引き下げのための諸法律」におけるヘンリー七世からエリザベス一世に至るチューダー朝の残虐立法の例示は、ほぼ全面的にイーデン『貧民の状態』からの引用であるにもかかわらず、マルクスはその事実を伏せて明らかにしていない。そのうえで、原典としてのイーデンには言及しないままで、イーデンによって引用されているホリンシェッド『イギリス記』第１巻186頁（Holinshed: *Description of England*. Vol.1. p.186）やストライプ『エリザベス女王の御代の宗教の改革および国定、その他英国国教会における諸種の事件に関する年誌』、第２版、1725年、第２巻（John Strype: *Annals of the Reformation and Establishment of Religion, and other Various Occurrences in the Church of England during Queen Elizabeth's Happy Reign*, 2nd edn, 1725, vol.2）については、著者名と文献名を明記している（S.764：3－395頁）。イーデンからの再引用、いわゆる孫引きであるにも拘わらず、あたかもこの珍しい文献を自ら発掘・参照したかの如く振舞っている。この部分をイーデンに全面的に依拠したことに忸怩たる思いがあって、イーデン依拠の事実を隠したかったのであろうか。詳細については、拙稿「マルクス残虐立法論の源泉 ── イーデン『貧民の状態』── 」、九州大学『経済学研究』第44巻第４・５・６号、1979年、167～193頁参照）。

に２週間以上逃亡した無産者は連れ戻された後、「額または頬にＳの字を烙印」されるという英語の規定（being branded on the forehead, or cheek, with the letter S）は、（soll auf Stirn oder Backen mit dem Buchstaben S gebrantmarkt）と正確に独逸語化されている。

(4) 英訳『資本論』の誤訳

マルクスの独逸語を英訳した英語版『資本論』では、Ｓの字を烙印される場所が、「額または頬に」ではなくて、「額または背に」と間違っている。マルクスが「額か頬に」（auf Stirn oder Backen）と正しく独逸語に訳した部分を英訳者が「額か背に」（on forehead or back）と誤訳したのである。以下に、英語版『資本論』三書（1887年版、1928年版、1976年版）の該当箇所を列挙する。下線部分が問題の誤訳である。「頬」を意味する独逸語には、〈die Wange〉と〈die Backe, der Backen〉との二つがある。マルクスが〈Backen〉を用いたために、英訳者が「背」を意味する〈back〉に間違えたものと考えられる。

（1）Edward VI. : A statute of the first year of his reign, 1547, ordains that if anyone refuses to work, he shall be condemned as a slave to the person who has denounced him as an idler. The master shall feed his slave on bread and water, weak broth and such refuse meat as he thinks fit. He has the right to force him to do any work, no matter how disgusting, with whip and chains. If the slave is absent a fortnight, he is condemned to slavery for life and is to be branded <u>on forehead or back</u> with the letter S; if he runs away thrice, he is to be executed as a felon.[10)]

（2）Then Edward VI came to the throne. The statute passed in 1547, the first year of his reign, declares that if any one refuses to work, he will be assigned as a slave to the person who has denounced him as an idler. The master shall feed his slave on bread and water, weak broth, and such refuse meat as he thinks fit. He is entitled to force the slave to do any work, no matter how disgusting, using whip and chain. Should a slave is absent himself for a fortnight without leave, the offender is to be condemned to slavery for life, and is to be branded <u>on forehead or back</u> with the letter S. If he should run away thrice, he is to be executed as a felon.[11)]

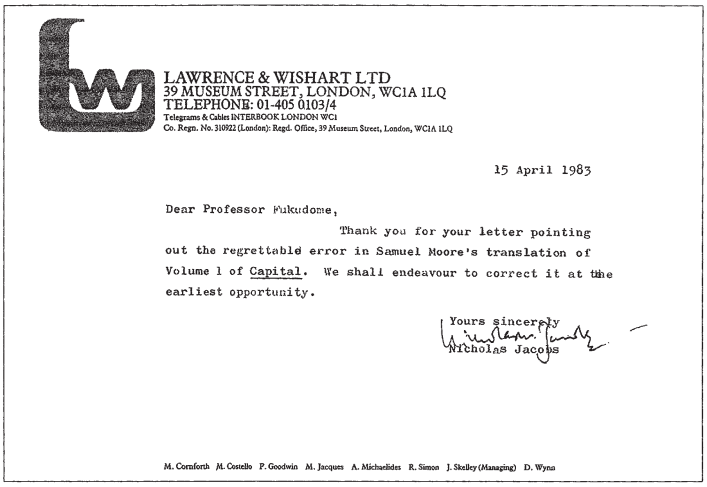
（3）Edward VI : A statute of the first year of his reign, 1547, ordains that if anyone refuses to work, he shall be condemned as a slave to the person who has denounced him as an idler. The master shall feed his slave on bread and water, weak broth and such refuse meat as he thinks fit. He has the right to force him to do any work, no matter how disgusting, with whip and chains. If the slave is absent a fortnight, he is condemned to

10）Karl Marx: *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production.* Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Swan Sonnenschein, Lowrey, & CO., 1887. p.758.

11）Karl Marx: *Capital,* Volume I. Translated by Eden and Cedar Paul. London, Allen and Unwin. 1928. Here cited from Everyman's Library Edition. 1967. p.814.

slavery for life and is to be branded on forehead or back with the letter S; if he runs away three times, he is to be executed as a felon.[12)]

筆者が、英語版『資本論』について、「頬」を「背」に間違えた誤訳を「発見」したのは、1979年春のことだった。その「発見」後、４年経過して、筆者は、1887年英国版を当時刊行していた Lawrence & Wishart Ltd. に誤訳の件を報知した。間もなく差出人 Nicholas Jacobs 名義で、'Thank you for your letter pointing out the regrettable error in Samuel Moor's translation of Volume One of Capital. We shall endeavor to correct it at the earliest opportunity.' という返信が届いた。


LAWRENCE & WISHART LTD
39 MUSEUM STREET, LONDON, WC1A 1LQ
TELEPHONE: 01-405 0103/4
Telegrams & Cables INTERBOOK LONDON WC1
Co. Regn. No. 310922 (London): Regd. Office, 39 Museum Street, London, WC1A 1LQ

15 April 1983

Dear Professor Fukudome,

Thank you for your letter pointing out the regrettable error in Samuel Moore's translation of Volume 1 of Capital. We shall endeavour to correct it at the earliest opportunity.

Yours sincerely
Nicholas Jacobs

M. Cornforth M. Costello P. Goodwin M. Jacques A. Michaelides R. Simon J. Skelley (Managing) D. Wyns

英語版マルクス・エンゲルス全集（*Karl Marx-Frederick Engels Collected Works*）の刊行が、Progress Publishing Group Corporation.（Moscow）—Lawrence & Wishart Ltd.（London）—International Publishers Co. Inc.（New York）三社連携の下で1975年から始まっていた。その全集の第35巻として『資本論』第１巻が1996年に刊行された。その序言にこう記されている。〈「現在刊行されるこの第一巻は、フレデリック・エンゲルスによって編集され、1887年に出版された最初の英語版に基づいている。（The present publication of Volume I is based on the first English edition, prepared by Frederick Engels and published in 1887.）〉。〈「この第一巻の出版を準備する過程で、最初の英語版に残っている明白な誤記や印刷所の誤植については、編集者が断りなしで訂正している。（In preparing this publication of Volume I, obvious slips of the pen and printer's errors in the first English edition have been corrected by the Editors without comment）〉。この巻の編集委員会の陣容を見ると、Eric Hobsbawm, John Hoffman, Nicholas Jacobs, Monty Johnstone, Jeff Skelley, Ernst Wangermann, Ben Fowkes という人々が英国部会を構成している。1976年英語版の訳者 Ben Fowkes の名前があり、1983年誤訳訂正の約束の書簡の発信人 Nicholas Jacobs も含まれている。（on forehead or back）という誤訳が（on forehead or cheek）と正しい英語に訂正されている、と当然にも筆者は期待した。しかしながら、その期待は虚しかった。以下に示す通り、（on forehead or back）という誤訳は、訂正されないままに残っていた。

（4）Edward VI. : A statute of the first year of his reign, 1547, ordains that if anyone refuses to work, he shall be condemned as a slave to the person who has denounced him as an idler. The master shall feed his

12）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume One. Translated by Ben Fowkes. London, Penguin Books. 1976. p.897.

slave on bread and water, weak broth and such refuse meat as he thinks fit. He has the right to force him to do any work, no matter how disgusting, with whip and chains. If the slave is absent a fortnight he is condemned to slavery for life and is to be branded on forehead or back with the letter S; if he runs away thrice, he is to be executed as a felon.[13)]

翻訳という苦役の陥穽

(1) 英語版訳者の共通弱点

1887年版、1926年版、1976年版、1996年版、これら四種の英語版『資本論』が共通に独逸語（Backen）を（cheek）と正しく英訳できずに（back）という誤訳を一世紀以上続けていることは、不思議であり、驚きでもある。1887年版と1926年版とを比較すると、文章の構成や使用される言葉について類似する部分より相互に異なる部分が多いことから、各々が原典としての独逸語『資本論』を苦労しつつ英語に翻訳したものと判断される。（Backen）を（cheek）と正しく英訳できずに（back）と誤訳したのも、（Backen）と（back）との外形的類似性に惑わされた結果だと考えられる。こうして1887年版と1926年版は、正当な翻訳書と見なすことができる。しかしながら、1976年版については、文章の構成や使用される言葉について1887年版に類似する部分が余りに多いことから、果たして本当に独逸語『資本論』に即して一字一字英語に移したのか疑いの残るところである。独逸語原典からの正当な翻訳書と見なすには躊躇を覚えざるを得ないものがある。（Backen）について（back）と記したのも、1887年版をそのまま踏襲したのかも知れない。1996年版については、「1887年に出版された最初の英語版に基づいている」と明記しているので、1887年版と全くと言って良いほどに同じであるのは当然のこととしても、「最初の英語版に残っている明白な誤記や印刷所の誤植については、編集者が断りなしで訂正している」と謳っている以上は、独逸語『資本論』と照合して詳細に点検したのであろう。そういう地道な点検作業がなされたならば、（Backen）について（back）と訳すのが誤りであることを見抜けたはずである。実際には誤りを見抜けていないわけで、この巻の編集者たちもまた（Backen）と（back）との外形的類似によって錯覚に陥ったと考えられる。

英語翻訳者たちが、文字の外形的類似に惑わされて、言葉の内面の意味に注意を怠ったことが惜しまれる。「奴隷」（slave）の頭文字のSを烙印するのは、奴隷身分であることを一般に明示するためである。それ故に、額か頬に烙印してこそ意味がある。衣服を着用すれば眼につかない背中に印字する意味は小さい。その点を考慮して、言葉の内面の意味に注意を怠らなければ、四種類の英語版『資本論』が揃って独逸語（Backen）を英語（back）に錯覚するという弱点は避けられたはずである。こういう弱点の存在に関しては、言語世界における英語の通用力の大きさの逆効果が考えられる。英語の世界規模の通用力ゆえに、独逸語に対して英語が外国語であるという意識が希薄化して、独逸語（Backen）を思わず英語（back）と読んで仕舞う錯覚に誘われたと考えるしかない。英語（back）とい

13）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume I. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Lawrence & Wishart. 1996. p.724.

う独逸語（Backen）に形の類似した言葉が存在しなければ、英語版の翻訳者たちは、（Backen）を独逸語という外国語として意識して、既知であればそのままで、未知であれば辞書を引いて、（cheek）と翻訳したはずである。

(2) 中国版と日本版の転変

英語の大きな通用力は、英語訳書以外にも影を落としている。独逸語原書とともに英語訳書を参照した中国版において、以下に示す通り、「在額上或背上」という形で、独逸語（Backen）が英語（back）に誤訳された余韻が「頬」とすべきところを「背」として残って仕舞った。「要是奴隷逃亡到十四天、他就要被判决为終身奴隷、在額上或背上、打上Ｓ的烙印。」[14)]

この誤訳は四半世紀を経ずに訂正された。1975年６月に、中共中央・马克思・恩格斯・列宁・斯大林・（マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン）著作編集局訳で *Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie.* Erster Band. *Karl Marx-Friedrich Engels Werke.* Band 23. を底本とする中国語版『資本論』ZIBENLUN の新訳書が刊行された。そして、該当する文章は、「如果奴隷逃亡达14天、就要判为终身奴隷、并在额头或脸頬打上Ｓ字样的烙印」というように、正しく「額か頬にＳ字を烙印される」と翻訳され訂正されていた[15)]。

英語版の誤訳の影響は日本版においてより大きいかも知れない。日本の学校制度においては、第二次大戦前から外国語学習はまず英語から始められるのが通例だった。独逸語学習は、戦前においては旧制高校から、戦後においては大学教養課程から始められるのであって、第二外国語としての扱いに留まらざるを得なかった。日本における最初の『資本論』完訳者となる高畠素之の場合でも、1909年、２か月の下獄中に読んだのは英語版『資本論』だった[16)]。

高畠訳書に刻まれた「額なり背なりに」という誤訳は、後述のように、第二次大戦後の長谷部文雄訳、向坂逸郎訳、岡崎次郎訳にも再現される。先行する翻訳書の後続の翻訳者への影響について、各人の証言を得ることができる。長谷部文雄は、「昭和十年の末ころ」から「十三年の春まで」毎週一回、『資本論』の研究会をもった。「この研究会の運営は、梯明秀を座長として、私は、テキストである高畠訳改造社版の誤訳悪訳を指摘訂正し、当番であるメンバーの研究報告を中心に討論するというやり方であった」[17)]。向坂逸郎は、高畠訳書の影響の大きさを、こう述べる。「高畠氏の訳本が出はじめたのは、私の学生時代であった。それ以後、私は、この高畠氏の訳本をいく度読んだかわからない。また、この訳本をつかっていくど研究会をやったか分らない。」「私共は、いつとはなしに高畠氏の訳語を頭に入れてしまっている」[18)]。

岡崎次郎は、向坂逸郎名義で刊行されている岩波文庫版の第一訳稿に着手した1947年ころから全巻

14）马克思『资本论 ── 政治经济学批判』郭大力、王亚南　訳、新華書店発行、1953年第１版、1963年第２版、811頁。
15）马克思『资本论』第一巻、人民出版社発行、1975年第１版、803頁。
16）田中真人『高畠素之 ── 日本の国家社会主義』現代評論社、1978年刊、54～55頁。
17）長谷部文雄「『資本論』とわが師、わが友（四）」『経済評論』1956年４月号、162頁。
18）向坂逸郎「資本論と四十年」『日本読書新聞』1957年２月４日号。

訳了の1954年までにおける、先行の長谷部訳の存在について、こう述べている。「その間私にとって幸運だったのは、終始長谷部訳が少なくとも数か月まえに出ていたことだった。もちろん長谷部訳をなぞったのではない。」「ただ『後者が前者の轍を踏まない』という消極的な意味で長谷部訳が大いに役立ったのである」[19]。

筆者が、独逸語（Backen）が英語（back）に誤訳されていることに気付いたのは1979年春、その事実を公表したのは1979年秋だった[20]。その時点までに完訳された日本版『資本論』五種の該当箇所を列挙すると次の通り、「頬」と訳すべきところが「背」と誤訳されている。

(1)「逃亡十四ヶ日に及ぶと、奴隷は終身奴隷にされ、額なり背なりにＳの字を烙印される」（高畠素之訳『資本論』第一巻、新潮社、1925年刊、987～988頁）。

(2)「奴隷が逃亡一四日に及べば終身奴隷の宣告を受けて、額または背にＳの字を烙印され」（長谷部文雄訳『資本論』第４分冊、青木文庫、1952年刊、1122頁）。

(3)「逃亡一四日間に及べば、奴隷は終身奴隷の宣告を受けて、額か背に、Ｓ字を烙印され」（向坂逸郎訳『資本論』第３分冊、岩波文庫、1969年刊、373頁）。

(4)「奴隷は、一四日間仕事を離れれば終身奴隷の宣告を受けて、額か背にＳ字を焼きつけられ」（岡崎次郎訳『資本論』第３分冊、国民文庫、1972年刊、393頁）。

(5)「奴隷は、一四日間仕事を離れれば終身奴隷の宣告を受けて、額または背にＳ字を焼きつけられ」（宮川實訳『資本論』第１巻第３分冊、あゆみ出版、1978年刊、225頁）。

筆者による誤訳の指摘がどの程度影響したかは定かでない。事実に即して言えば、その後に刊行された三種の日本版『資本論』においては、「背」の誤訳は「頬」と訂正されている。

(6)「奴隷は一四日間仕事を離れれば、終身奴隷の宣告を受け、額か頬にＳ字の烙印を押され」（資本論翻訳委員会訳『資本論』第４分冊、新日本出版社、1983年刊、1259頁）。

(7)「奴隷が一四日間にわたって逃亡したら、終身奴隷の刑を受け、額か頬にＳの字を烙印される」（今村仁・三島憲一・鈴木直・訳『資本論』第一巻下、筑摩書房、2005年刊、533頁）。

(8)「この奴隷が一四日間にわたって逃亡していた場合には、終身奴隷の判決が下され、Ｓの文字が額か頬に烙印される」（中山元・訳『資本論』第１巻Ⅳ、日経 BP 社、2012年刊、411頁）。

(3) 翻訳という辛苦の労働

「われわれは人間にしか見られないような形態の労働を想定する。蜘蛛は織匠の作業に似た作業をするし、蜜蜂はその蝋房の構造によって多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、最も下手な建築師といえども最良の蜜蜂にはじめから優る点は、建築師は房を蝋で築く前にすでに頭のなかでそれを作り上げているということである。労働過程の終りには、その始めに労働者の心象のなかに、つまり観念的に、すでに存在していた結果が出てくるのである。」「労働者は、自然に存在する物の形態を変化

19）岡崎次郎『マルクスに凭れて六十年、自嘲生涯記』青土社、1983年刊、223頁。
20）福留久大「マルクスは頬と訳した」お茶の水書房『社会科学の方法』1979年10月号７～９頁。

させるだけではない。彼は、自然に存在する物のうちに、同時に彼の目的を実現する。その目的は、彼が知っているものであり、法律のように彼の行動の仕方を決定し、彼はこの目的に自分の意志を従属させなければならない。そして、この従属は決してばらばらの行為ではない。労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現れる合目的的な意志が労働の継続期間全体にわたって必要である」(S.193；1－312～３頁)。

マルクスは、人間労働の特質について、上のような優れた説明を与えている。筆者は、前半部分を「目的目標設定の可能性」を示すもの、後半部分を「合目的的行動の可能性」を示すものと呼んでみた[21)]。

蜘蛛や蜜蜂の行動が本能に基づくのに対して、人間は自ら目的目標を設定して労働する。その目的目標の達成を目指して自らの労働を制御する。そこに人間労働の主体的特質、創造性が認められる。労働の目的目標が労働者の意に添わない場合について、こう付け加えられている。「労働自体の内容や手法が労働者にとって魅力に欠けたものであればあるほど、つまり労働者が肉体的精神的諸力の自由な営みとして楽しむ度合いが少なければ少ないほど、この意志は必要となる」(S.193；1－313頁)。

翻訳作業は、一般に「自由な営み」(Spiel) から遥かに隔たった存在である。作業の対象が、他国の他人の著作物であることによって、目的目標設定の主体性、創造性が失われているからである。圧縮された他人の言説の意味内容を読み解いて自国語に移し替えること自体が容易ではない。加えて自国語への移し替えに際して越え難い壁に遭遇することが少なくない。自己の著作物ならば、不明の事項は書かずに避けて通ることができるが、翻訳ではそれは許されない。筆者の翻訳体験では、こういう事例に遭遇した。I・バーリンのマルクス評伝 (Isaiah Berlin: *Karl Marx*) のなかに、マルクスが長期にわたって交際を楽しみ共に講演を行った人物、元外交官で無所属党派の国会議員、ダヴィッド・アーカート (David Urquhart) について、彼がコンスタンチノープル勤務のなかでトルコ人に愛着を抱くに至り「トルコ人の気質の『純粋さ』とトルコ風呂の精神的肉体的効能を称賛して、それを英国人に紹介した。」(He selebrated the 'purity' of the Turkish constitution, and the spiritual and physical effects of Turkish steam baths, to which he introduced his countrymen.) という記述が登場する[22)]。翻訳当時、「トルコ風呂」は、日本では、専ら性風俗店の名称として使用されていた。そのために「トルコ風呂」と翻訳して良いか否か、悩むことになった。長い逡巡の後、トルコ大使館に問い合わせた。「トルコ風呂の名称をそのまま使ってください。日本での間違った名称については、われわれが是正に努めます」との返事を得ることができた。その後、ソープランドと変更されて、トルコ風呂の名称は消えた。

いま一つは、こういう事例である。支持者・信奉者にとってのマルクス像をバーリンは次のように描いている。「彼らにとってマルクスは、現代の怒れる不屈のモーゼであり、辱められ抑圧されているすべての人々の指導者にして救済者であった。その傍らに控えるエンゲルスは、より穏やかで世事に

21) 福留久大『ポリチカルエコノミー』九州大学出版会、2004年刊、131～２頁。
22) Isaiah Berlin: *Karl Marx；His Life and Environment*. Fourth edition. Oxford University Press, 1978. p.149.　福留久大・訳、『人間マルクス ── その思想の光と影』サイエンス社、1984年刊、232頁。

通じており、暗愚で理解もおぼつかないプロレタリアート大衆にマルクスの言葉を説明して聞かせようとしているアロンであった」(To them he［=Marx］appeared as an angry and indomitable modern Moses, the leader and saviour of all the insulted and the oppressed, with the milder and more conventional Engels at his side, an Aron ready to expound his words to the benighted, half-comprehending masses of the proletariat.)[23]。

『旧約聖書』出エジプト記では、アロンが３歳年長の兄で、モーゼは弟である。マルクスは1818年生まれで、1820年生まれのエンゲルスに対して２歳年長である。聖書の登場人物なので、日本人読者のためには訳註が必要と考えた。しかし、アロンとモーゼ、マルクスとエンゲルス、この二組のねじれた年長年少関係に大いに迷い惑うことになった。結局、アロンを兄とせずに「モーゼと兄弟」と註記して逃げることにした。

言語の表面的意味の奥に存在する内面的意味の探求を楽しむことのできる言葉の達人を例外として、一般の翻訳者は一刻も早くこの種の外圧的苦役から逃れたい思いに駆られる。締切に追われるときは、なおさらにその思いが募ることになる。こうした事情を勘案すれば、『資本論』の英語翻訳に際して、英語の通用力への依存心が強く、それだけに外国語としての独逸語への探求心が希薄になりがちな英語翻訳者が誤訳を犯しやすいことには、十二分に同情を寄せる余地が存在する。と同時に、その点に、後発の、或いは後進の日本人研究者が優位を占め得る理由を求めることができる。以下に、その実例を示すことを試みる[24]。

ドッグベリーの顛倒性

マルクスは、『資本論』第一巻第一章「商品」第四節「商品の物神的性格とその秘密」の末尾部分で、「商品世界に纏いついている物神崇拝によって甚だしく欺かれている」経済学者として、『政治経済学における或る用語論争に関する考察、特に価値ならびに需要供給に関連して』(*Observations on certain verbal disputes in Political Economy, particularly relating to value, and to demand and supply*)の匿名著者と『価値の性質・尺度および原因に関する批判的論究、主としてリカード氏とその追随者の著作に関連して』(*A critical dissertation on the nature, measure, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers*.)の著者Ｓ・ベイリー(Samuel Bailey)を挙げている。この二人の経済学者の商品形態を巡る誤解例二つを引用して説明を加える。その説明の末尾に誤解例を象徴するものとして、シェイクスピア(Shakespeare)の『空騒ぎ』(*Much Ado About Nothing*)から短い章句を引用する。シェイクスピアの原文とマルクスの引用を併記すると、次のようになる。

---

23) Berlin: p.160.: 訳書250頁。

24) 以下の「ドッグベリーの顛倒性」「クイックリーの寡婦性」について、詳細は拙稿「『資本論』の沙翁引用 ── 物神崇拝と『空騒ぎ』」(九州大学『経済学研究』第87巻第４号、67～84頁)、「『資本論』の沙翁引用 ── 価値形態論の端緒規定」(九州大学『経済学研究』第85巻第１号、121～133頁)参照。以下では、要点の摘録と翻訳に関わる事項の検討に主眼を置く。

Shakespeare: “to be a well-favoured man is the gift of fortune: but to write and read comes by nature.”
「およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢゃが、読むと書くとは自然にして具るんぢゃから」[25)]。
Marx: „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“
「容貌の良い男であることは境遇の賜だが、読み書きができるということは自然の業である」[26)]。

両方を照合してみると、S（to be a well-favoured man）をM（Ein gut aussehender Mann zu sein）「容貌の良い男であること」に、S（to write and read）をM（lesen und schreiben zu können）「読むこと書くこと（ができる）」に、S（comes by nature.）をM（kommt von Natur）「自然に具わる（＝自然の業である）」に、という具合に、三部分は、一語一語対応する形で英語が独逸語に翻訳されている。残りの一語句、シェイクスピアの「運命の賜」（the gift of fortune）をマルクスが「境遇の賜」（eine Gabe der Umstände）と置き替えている。原文に即して翻訳するならば、英語（fortune）「運」「運命」「運命の女神」に対応する独逸語（Glück）「運」「運命」「運命の女神」が選択されるはずのところが、少し異なる（Umstände）「事情」「境遇」の語に置き換えられている。

原文の「運命」を「境遇」に代えたことで、この台詞は事実を巡って二つの誤りを含んだものに変化している。「容貌の良い男であること」は、容貌の良い両親から生まれた「運命の賜物」だというのは事実だが、「境遇」に依るというのは事実に反するだろう。逆に、「読み書きができるということ」が、生まれながらに自然に具わるものでないことは、誰もが知る通りに余りにも明らかである。周囲に文字を教える大人がいるとか、学校に行けるだけの経済的余裕があるなど、子供の置かれた「境遇」に依るところが大きいのである。

シェイクスピアの原文 “to be a well-favoured man is the gift of fortune: but to write and read comes by nature.” では、台詞の前半「容貌の良い男であることは運命の賜物である」という部分は事実に即しており、事実の間違いはない。台詞の後半「読むと書くとは自然に具わる」という部分が事実に反しており、間違いの台詞となる。マルクスの独逸語翻訳 „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“ では、台詞の前半「容貌の良い男であることは境遇の賜だ」も、台詞の後半「読み書きができるということは自然の業だ」も二つながら事実に反しているわけで、この台詞に二つの事実の間違いを含ませたということになる。

マルクスが、ドッグベリーの台詞について、シェイクスピアの原作に変更を加えて、事実と違うこと二つを含ませたのには、次のような理由がある。マルクスは、先行する二人の経済学者 ――『考察』の匿名著者とS・ベイリーとが、「富」（riches）と「価値」（value）を巡って、酷似した文章を残していることに気付く。匿名者は述べる。〈「価値は物の属性であり、富は人間の属性である。」“Value is a property of things, riches of man.”〉[27)]。ベイリーは記す。〈「富は人間の特性であり、価値は商品の特性である。……真珠やダイヤモンドは、真珠やダイヤモンドとして価値を有している」“Riches are the

25）シェークスピア著・坪内逍遥訳『ザ・シェークスピア ―― 全戯曲（全原文＋全訳）』第三書館、1989年刊、487頁。
26）*Das Kapital*, Erster Band. a. a. O., S.98. 訳文は拙訳。

attribute of man, value is the attribute of commodities. … A pearl or a diamond is valuable as a pearl or diamond.”〉[28]。

これら両者の見解について、マルクスは「富（riches; Reich）」を「使用価値（use-value; Gebrauchswert）」に読み替えて、二経済学者の見解をこう要約する。〈「この化学的実体の経済学的発見者たちは、特別に批判の鋭さを自負して、物の使用価値はその物的属性には関わりがないこと、それに対してその価値は物としてのそれに属していることを見出すのである」„Die ökonomischen Entdecker dieser chemischen Substanz, die besondren Anspruf auf kritische Tiefe machen, finden aber, daß der Gebrauchswert der Sachen unabhängig von ihren sachlichen Eigenschaften, dagegen ihr Wert ihnen als Sachen zukommt.“〉（S.98; 1－154頁）。つまり、物象の使用価値は物象に関わりなくて、物象の価値（交換価値）は物象に属している、と二経済学者が主張しているというのがマルクスの理解である。

物象（a）の使用価値はその所有主体（A）の欲求を直接に満たすことが出来る。その意味でここでの使用価値は物象（a）に属している。商品（a）の価値は、他の商品、例えば商品（b）を交換に引き寄せる力（交換可能性）を意味しており、その使用価値によって商品（b）の所有主体（B）の欲求に応えることを梃子にして、交換を実現してこそ価値が実現される。「豚に真珠」「猫に小判」の言葉のように、人間主体が消えれば、真珠や小判の交換可能性も消滅する。その意味でここでの価値は物象自体に内在しているわけでは無い。あくまで人間主体との相関関係において存在を有するものである。こうして商品の使用価値は物としてのそれに属しており、商品の価値はその物的特性とは関わりなく人間主体との関わりのなかで存在することが商品形態の特質であるから、匿名著者とベイリーの商品論は、二つの点で顛倒性を示しているということになる。

マルクスは、経済学者の二点の顛倒性を浮かび上がらせるものとして、ドッグベリーの台詞に二点の事実の間違いを組み込んで、こう述べる。〈「ここで、あのお人よしのドッグベリーを思い出さない人があろうか。彼は夜番のシーコウルに教えて語る ――『容貌の良い男であることは境遇の賜だが、読み書きができるということは自然の為す業である』と（Wer innert sich hier nicht des guten Dogberry, der den Nachtwächter Seacoal belehrt; „Ein gut aussehender Mann zu sein ist eine Gabe der Umstände, aber lesen und schreiben zu können kommt von Natur“）』〉[29]。

シェイクスピアの原文に変更の筆を加えたマルクスの独逸語文章を、英語版『資本論』の翻訳者たちは、正確に英語に移すことが出来ているだろうか。1887年版、1928年版、1976年版、1996年版、それに加えて匿名訳者による部分訳『資本論』（Broadhouse 版）[30] について、該当箇所を挙げてみる。

（1）1887 Edition

Who fails here to call to mind our good friend, Dogberry, who informs neighbour Seacoal, that, “To be a

27）Anonym: *Observations on some verbal disputes in Pol. Econo., particularly relating to value, and to supply and demand*, London. 1821, p.16.

28）Samuel Bailey: *A critical dissertation on the nature, measure, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers*. London.1825, p.165.

well-favoured man is the gift of fortune ; but reading and writing comes by nature." [31)]

（2）1928 Edition

Surely, in this connexion , every one will recall the excellent Dogberry's instruction to neighbour Seacoal: "To be a well-favoured man is the gift of fortune ; but to write and read comes by nature." [32)]

（3）1976 Edition

Who would not call to mind at this point the advice given by the good Dogberry to the night-watchman Seacoal ? "To be a well-favoured man is the gift of fortune ; but reading and writing comes by nature." [33)]

（4）1996 Edition

Who fails here to call to mind our good friend, Dogberry, who informs neighbour Seacoal, that, "To be a well-favoured man is the gift of fortune ; but reading and writing comes by nature." [34)]

（5）Broadhouse Edition

29）*Das Kapital*, Erster Band. a. a. O., S.98. 岡崎次郎訳『資本論』国民文庫第１分冊154頁。ただし、シェイクスピアの台詞をマルクスが距離を置いた形で独逸語に翻訳した点に注意を怠ったために、岡崎訳を含めて誤訳が生じている。日本版『資本論』の該当箇所を列挙する。

＊向坂逸郎「立派な容貌の男であるのは境遇の賜物だが、読み書きが出来るということは生れつきだ」。『資本論』第一巻第一分冊（岩波文庫、1947年刊、160頁）。

＊長谷部文雄「男ぶりがよいということは境遇の賜ものだが、読み書きが出来るということは生まれつきだ」。『資本論』第一部第一分冊（青木文庫、1952年刊、190頁）。

＊岡崎次郎「およそ容貌の善悪は運命の賜であるんぢゃが、読むと書くとは自然にして具るんぢゃから ...」。『資本論』第一巻第一分冊（国民文庫、1972年刊、154頁）。シェイクスピアの台詞の坪内訳を転用したのでマルクスの翻訳としては不適当。

＊資本論翻訳委員会「男ぶりのいいのは運の賜物だが、読み書きは自然にそなわるものだ」。『資本論』第一巻第一分冊（新日本出版社、1982年刊、142頁）。シェイクスピアの台詞の小田島訳を転用したのでマルクスの翻訳としては不適当。

＊今村仁司・三島憲一・鈴木直「風采がいいのは境遇のたまものだが、読み書きができるのは生れつきのものだ」。『資本論』第一巻（上）（筑摩書房、2005年刊、127頁）。

＊中山元「容貌のよしあしは神の賜物だが、読み書きは生来そなわったものだ」。『資本論』第１巻Ｉ（日経ＢＰ社、2011年刊、141頁）。シェイクスピア原文に誤誘導されて、「境遇」とすべきところを「神」と訳した。

＊前掲拙稿「『資本論』の沙翁引用 ── 物神崇拝と『空騒ぎ』」においては、（well-favoured = gut aussehender）「容貌の整った、容貌の良い」について、「男ぶりがよい」「風采がいい」を不適訳と判断していた。些事に拘り過ぎているとの指摘を受けて反省し、不適訳との判断を訂正する。

＊上述のように、岡崎訳、資本論翻訳委員会訳、中山訳に誤訳が認められる。他の三書は、独逸語からの適切な翻訳で、注意を要する弱点を回避できている。

30）月刊雑誌 "To-day" の1885年10月号から1889年５月号まで、J. Broadhouse なる人物が『資本論』の第１章「商品」から第８章「労働日」までの英訳を掲載した。後に第７章「剰余価値率」までを一本にまとめて『価値学説：『資本論』の最初の９章から構成されている』（*The Theory of Value; Forming the First Nine Chapters of "Capital"* By Karl Marx. London. William Reeves Bookseller Limited）として刊行された。その際に、第４章「貨幣の資本への転化」の章名に代えて、第４章を構成する３つの節が第４章「資本の一般定式」第５章「資本の一般定式の矛盾」第６章「労働力の購買と販売」と章に格上げされた。こうして『価値学説』は９章構成となっている。訳者名は表題には出ていないが、訳註の後に J.B. という略記が付されている。エンゲルスによると、John Broadhouse は Henry Mayers Hyndman の筆名だという（杉本俊朗『資本論』英語版解題、『資本論辞典』青木書店、1961年刊、714頁）。この書物は、1980年代まで数十円の廉価で日本からでも新本の購入が可能だった。

31）Karl Marx: *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production*. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Swan Sonnenschein, Lowrey, & CO., 1887. p.55.

32）Karl Marx: *Capital*, Volume I.Translated by Eden and Cedar Paul. London, Allen and Unwin. 1928. Here cited from Everyman's Library Edition. 1967. p.58.

33）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume One. Translated by Ben Fowkes. London, Penguin Books. 1976. p.177.

Who does not here call to mind the good Dogberry, and the lesson he gave to Seacoal : “To be a well-favoured man is the gift of fortune ; but to write and read comes by nature.” [35)]

これら五種の英語版『資本論』の該当箇所を一読すれば、〈「ここで、あのお人よしのドッグベリーを思い出さない人があろうか。彼は夜番のシーコウルに教えて語る」(Wer innert sich hier nicht des guten Dogberry, der den Nachtwächter Seacoal belehrt)〉という部分については、夫々にマルクスの独逸語を英語に移しているが、ドッグベリーの台詞部分については、〈「境遇の賜」(eine Gabe der Umstände)〉というマルクス苦心の独逸語は（a gift of circumstnces）と英訳されることなく、完全に無視されていることが判明する。台詞部分は、シェイクスピアの原文そのもの（1928年版とBroadhouse版)、或いは（to write and read）を（reading and writing）へ多少変更したもの（1887年版、1976年版、1996年版）であって、独逸語を翻訳したものではない。それ故に、この部分については、五種の英語版『資本論』は揃って翻訳書としては失格と断言せざるを得ないのである。

クイックリーの寡婦性

マルクスは、『資本論』第一巻第一章「商品」第三節「価値形態または交換価値」に進んで間もない第二の分節で、「価値対象性」の捉え難さの対極的存在として、シェイクスピア（Shakespeare）『ヘンリー四世』（*King Henry IV*）の登場人物・寡婦フルティヒ（英語では）クイックリーを取り上げている。シェイクスピアからの引用に関わる部分に下線を施してある。

〈Die Wertgegenständlichkeit der Waren unterscheidet sich dadurch von der Wittib Hurtig, daß man nicht weiß, wo sie zu haben ist. Im graden Gegenteil zur sinnlich groben Gegenständlichkeit der Warenkörper geht kein Atom Naturstoff in ihre Wertgegenständlichkeit ein. Man mag daher eine einzelne Ware drehen und wenden, wie man will, sie bleibt unfaßbar als Wertding. Erinnern wir uns jedoch, daß die Waren nur Wertgegenständlichkeit besitzen, sofern sie Ausdrücke derselben gesellschaftlichen Einheit, menschlicher Arbeit, sind, daß ihre Wertgegenständlichkeit also rein gesellschaftlich ist, so versteht sich auch von selbst, daß sie nur im gesellschaftlichen Verhältnis von Ware zu Ware erscheinen kann. Wir gingen in der Tat vom Tauschwert oder Austauschverhältnis der Waren aus, um ihrem darin versteckten Wert auf die Spur zu kommen. Wir müssen jetzt zu dieser Erscheinungsform des Wertes zurückkehren.〉

〈商品の価値対象性は、どうにも捉えようのわからない代物だということによって、寡婦フルティヒと区別される。商品体の感覚的に粗雑な対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材は入っていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにひねくり回してみても、価値物としては相

34）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume I. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Lawrence & Wishart. 1996. p.94.

35）Karl Marx: *The Theory of Value; Forming the First Nine Chapters of “Capital“*. Translated by John Broadhouse. p.48.

変わらず捉えようがないのである。とはいえ、商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的存在であることを思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現れえないこともまたおのずから明らかである。われわれも、実際、商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再びこの価値の現象形態に帰らなければならない。〉（S.62; 1-93頁）[36]。

マルクスの引用文における〈(wo sie zu haben)「何処でそれを捉えるか」〉という独逸語表現が、シェイクスピアの〈(where to have her)「何処で彼女を捉えるか」〉という英語表現と外形上の類似性を有するところから、引用元は『ヘンリー四世』第１部第３幕第３場（*The First Part of King Henry IV*, Act 3 Scene 3）のなかの次の文章だと推定されている[37]。

Falstaff. Why, she's neither fish nor flesh; a man knows not where to have her.

Hostess. Thou art an unjust man in saying so: thou or any man knows where to have me, thou knave, thou!

坪内逍遥訳〈フォルスタッフ	だって、魚でもなければ四脚でもない。どう始末していいか分からん物だからだ。
内儀	そんなことを言ふなァあんまりです。おまえさんだって、誰だって、私をば好いやうに始末するぢゃないの？　こん畜生！[38]
中野好夫訳〈フォルスタッフ	なぜって、お前、魚でもなきゃ、四つ脚でもねえ、てんで為体（えてえ）の知れねえ代物だからよ。

36）日本版『資本論』においても〈「寡婦」(die Wittib)〉を正確に訳出していない場合がほとんどである。以下に実例を列挙する通り、資本論翻訳委員会のみが的確に翻訳している。

＊向坂逸郎「諸商品の価値対象性は、かのマダム・クイックリ［シェイクスピアの『ヘンリー四世』等の中の人物 ── 訳者］と異って、一体どこを掴まえたらいいか、誰にもわからない」。『資本論』第一巻第一分冊（岩波文庫、1947年刊、94頁）。

＊長谷部文雄「諸商品の価値対象性はつかまえどころがない点でクイックリー夫人［シェイクスピアの『ウインザーの陽気な女房』や『ヘンリー四世』に出てくる人物 ── 訳者］と異なっている」。『資本論』第一部第一分冊（青木文庫、1952年刊、133頁）。

＊岡崎次郎「商品の価値対象性は、どうにもつかまえようのわからないしろものだということによって、マダム・クイックリとは違っている」。『資本論』第一巻第一分冊（国民文庫、1972年刊、93頁）。

＊資本論翻訳委員会「商品の価値対象性は、どうつかまえたらいいかわからないことによって、寡婦のクイックリーと区別される」。『資本論』第一巻第一分冊（新日本出版社、1982年刊、81頁）。

＊今村仁司・三島憲一・鈴木直「商品の価値対象性は、とりつくしまもないという点でクイックリー夫人［シェイクスピア『ヘンリー四世』第一部第三幕 ── 訳者］とはちがう」。『資本論』第一巻（上）（筑摩書房、2005年刊、73頁）。

＊中山元「商品の価値とは実際には何であるのかは、どうにも捉えどころがなく、そこがクイックリー夫人とは違う」。『資本論』第１巻Ｉ（日経ＢＰ社、2011年刊、60頁）。

37）現行の独逸語『資本論』においては、この引用文に次のような註記が添えられている。〈[22] Shakespeare, „König Heinrich der Vierte“, 1.Teil, 3. Aufzug, 3.Szene.「シェイクスピア『ヘンリー四世』第１部第３幕第３場」〉(S.62; 1－93頁)（S.848; 1－407頁）。マルクス以後の編集者によって、この推定がなされたと考えられる。

38）前掲、シェークスピア著・坪内逍遥訳、169頁。

女将　　まあ、ひどいこと言うわねえ。あたしがなんだくらい、お前さんだって、誰だって、わかってるはずじゃないか、この碌ろくでなしがよゥ[39]。

しかしながら、マルクスの引用元を『ヘンリー四世』第１部第３幕第３場だとすると、内容上の整合性が欠如することになる。第一に、マルクスは、「商品の価値対象性は、どうにも捉まえようのわからない代物だということによって、寡婦フルティヒと区別される」と書いている。「商品の価値対象性」は捉え難い、「寡婦フルティヒ（英語では）クイックリー」は捉え易い、と言っていることになる。しかし、引用元と推定されるフォルスタッフの台詞は、「寡婦クイックリー」について「どう捉えてよいかわからない（a man knows not where to have her.）」と、捉え難さを強調している。「商品の価値対象性」と「寡婦クイックリー」は捉え難さにおいて「区別される」のではなくて「似ている」と言わねばならない。第二に、『ヘンリー四世』第１部第３幕第３場において、クイックリーは人妻であって寡婦ではない。

この二点は、フォルスタッフとクイックリーの間の前出のやりとりの一つ前で、クイックリーが「あたしゃね、そんなお有難い代物じゃないからね。はっきり申し上げておくけども、これでもちゃんとした男の女房なんだからね（I am no thing to thank God on, I would thou shouldst know it; I am an honest man's wife.）」と切る啖呵で明らかになる。中野好夫の註解では、「お有難い代物（thing to thank God on）」とは、「神様にお礼を申し上げなければならないような物」であり、「神様がおつくりになったままの女」、「女とは天地創造以来、有難いことに浮気者、多情者と相場が決まっている、というくらいの意」を含んでいる[40]。そこで、クイックリー女将は、浮気者でないことを強調している。ここでのクイックリーは、簡単に男性の言いなりになるような存在ではないものとして描かれている。とすれば、フォルスタッフの台詞通りに、クイックリー女将は「捉え難い」ことで「商品の価値対象性」に似ていることになる。さらに、「ちゃんとした男の女房」であって、「寡婦」ではないことも明らかである。

マルクスによるクイックリーの人物鑑定は、『ヘンリー四世・第一部』のこの場面に基づくものでないと考えると、『ヘンリー四世・第二部』に登場するクイックリーに注目することになる。こちらでは、「私はイーストチープのしがない寡婦でございます（I am a poor widow of Eastcheap）」[41] と言う通り、寡婦となっている。一方で溜まった飲み代を払わないからと言ってフォルスタッフを裁判に訴えていながら、他方でフォルスタッフの甘言にほだされて質入れしてまでカネを作って貸そうとする[42]。一方で、裁判長がフォルスタッフを「察するに、その方は、触れなば落ちんこれなる女心をよいことに、巧みの篭絡、金入ればかりか、身体まで利用したということらしいな（you have, as it appears to me, practised upon the easy-yielding spirit of this woman, and made her serve your uses both in purse and in person.）」と責めるのに同調して「そうなんでございますよ、まったくの話（Yea, in truth, my lord.）」[43]

39）シェイクスピア著・中野好夫訳『ヘンリー四世』第一部（岩波文庫、1969年刊）125頁。
40）前掲、中野訳書、196～197頁。
41）前掲、坪内訳書、185頁。中野好夫訳『ヘンリー四世』第二部（岩波文庫、1970年刊）45頁。
42）前掲、坪内訳書、184頁、187頁。前掲、中野訳書、42頁、49頁。
43）前掲、坪内訳書、185頁。前掲、中野訳書、47～48頁。

と非難するかと思うと、他方では、「お前さんと私は二九年の馴染みよ、けどもお前さんのような正直な、真実の……（I have known thee these twenty nine years; but an honester and truer-hearted man ……）」[44] と褒め上げる。それほどに鈍感で軟弱な出鱈目な女になっている。これらの事情を勘案すると、マルクスがクイックリーを「捉え易い」と判定する根拠は『ヘンリー四世・第二部』に在ると考えられる。

マルクスのシェイクスピアからの引用文を読み解く要諦は、上述の如く、二つあった。それはまた、翻訳に際しての注意点でもあった。一つは、マルクスが「寡婦フルティヒ（Wittib Hurtig）」としていること、英訳するならば「寡婦クイックリー（Widow Quickly）」となるはずである。二つには、シェイクスピアの〈（a man knows not where to have her）「何処で彼女を捉えるかわからない」〉という英語表現の含意を、マルクスが小さく変更して〈（man nicht weiß, wo sie zu haben ist.）「何処でそれを捉えるかわからない」〉という独逸語に翻訳したことである。シェイクスピアでは「捉え難い」対象は「彼女」つまり「クイックリー」である。マルクスでは「何処でそれを捉えるか（wo sie zu haben）」の代名詞 “sie” は「彼女」つまり「クイックリー」ではなくて、「それ」つまり女性名詞「価値対象性（die Wertgegenständlichkeit）」を指している。この二点を正確に理解できなかったことによって、英語版『資本論』においては、誤訳や混乱が生じる結果になっている。以下に、1887年版、1928年版、1976年版、1996年版、Broadhouse Edition に加えて、The Great Books Edition の該当箇所を列挙する。斜字体は筆者による。

（0）独逸語原文

〈Die Wertgegenständlichkeit der Waren *unterscheidet sich* dadurch von der Wittib Hurtig, daß man nicht weiß, wo sie zu haben ist.〉

（1）1887 Edition

〈The reality of the value of commodities *differs* in this respect from Dame Quickly, that we don’t know “where to have it.” [45]〉

（2）1928 Edition

〈The reality of the value of commodities thus *resembles* Mistress Quickly, of whom Falstaff said: “A man knows not where to have her.” [46]〉

（3）1976 Edition

〈The objectivity of commodities as values *differs* from Dame Quickly in the sense that “a man knows not where to have it.” [47]〉

44）前掲、坪内訳書、192頁。前掲、中野訳書、85頁。

45）Karl Marx: *Capital, A Critical Analysis of Capitalist Production*. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Swan Sonnenschein, Lowrey, & CO., 1887. p.15.

46）Karl Marx: *Capital,* Volume I.Translated by Eden and Cedar Paul. London, Allen and Unwin. 1928. Here cited from Everyman’s Library Edition. 1967. p.17.

47）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume One. Translated by Ben Fowkes. London, Penguin Books. 1976. p.138.

（4）1996 Edition

〈The reality of the value of commodities *differs* in this respect from Dame Quickly, that we don't know "where to have it." [48)]〉

（5）The Broadhouse Edition

〈The objective value of commodities *is not like* Dame Quickly, of whom one did not know where to have her. [49)]〉。

（6）The Great Books Edition

〈The reality of the value of commodities thus *resembles* Dame Quickly, of whom Falstaff said: "A man knows not where to have her." [50)]〉。

これら六種の英語版『資本論』は、引用文のなかのクイックリーが寡婦であることを揃って看過している。その結果、マルクスの（wo sie zu haben）とシェイクスピアの（where to have her）の外形上の類似性から、マルクスのクイックリー評価の根拠は『ヘンリー四世』第１部第３幕第３場に在ると判断することになる。残るは、〈「何処で "sie" を捉えるかわからない」（man nicht weiß, wo sie zu haben ist.）〉の代名詞 "sie" が、「価値対象性（die Wertgegenständlichkeit）」を指すか、「寡婦フルティヒ（die Wittib Hurtig）」を指すか、が分岐点になる。〈「寡婦フルティヒと区別される」（unterscheidet sich von der Wittib Hurtig）〉という動詞に着目すれば、代名詞 "sie" が、「価値対象性（die Wertgegenständlichkeit）」を指すと考えざるを得ない。だが、1928 Edition と The Great Books Edition においては、その着目を怠って、代名詞 "sie" が「寡婦フルティヒ（die Wittib Hurtig）」を指すと誤解した。そのために、捉え難さにおいて「価値対象性」は「クイックリー夫人」に〈「似ている」（resembles）〉と誤訳する結果になっている。この点で、全く筋が通らないのが、The Broadhouse Edition である。「価値対象性」は「クイックリー夫人」に〈「似ていない」（is not like）〉としながら、その「クイックリー夫人」を捉え難いと評価しているのである。とすれば、捉え難い点で「価値対象性」と「似ている」としなければ筋が通らないことになる。

以上のように英語版『資本論』を点検すると、英語翻訳者たちが英語に対する依存心の強さゆえに外国語としての独逸語に対する関心・注意において欠けるところが在ることを知り得る。その関心・注意の強さにおいて翻訳文化・雑種文化のなかに育たざるを得ずに彼我の言語の意味内容の論理性に

48）Karl Marx: *Capital, A Critique of Political Economy*. Volume I. Translated by Samuel Moore and Edward Aveling, edited by Frederick Engels. London, Lawrence & Wishart. 1996. p.57.

49）Karl Marx :*The Theory of Value; Forming the First Nine Chapters of "Capital"*. Translated by John Broadhouse. p.13.　ここに次の註記が付されている。The reference is doubtless to Henry IV., where Falstaff says of Dame Quickly, "Why, she's neither fish nor flesh, a man knows not where to have her."

50）シカゴ大学によって企画された The Great Books of the Western World シリーズの一冊として、『共産党宣言』と合本の形で、1952年にシカゴで刊行された。Karl Marx: *Capital.* Translated from the third German edition by Samuel Moore and Edward Aveling. Edited by Friedrich Engels. Revised, with additional translation from the fourth German edition, by Marie Sachey and Herbert Lamm.（Encyclopaedia Britannica, Chicago）p.19.

注目することが習い性となった日本人研究者は、少なからざる優位性・有利性を有していると言える。

捉え易いとされる「寡婦フルティヒ（die Wittib Hurtig）」とは対照的に捉え難いとされる「価値対象性（die Wertgegenständlichkeit）」は、どのように捉えられるか。ここまで言及していないので、簡単に説明を加えておきたい。一般的に、対象（Gegenstand）とは、それに向かって身体的・精神的活動が行われるとき、見られるもの、聞かれるもの、動かされるもの、考えられるものなどのような客体と考えられる。対象性（Gegenständlichkeit）とは、その客体が行為や意識の主体に対峙して現れる対象としての在り方と言えよう。「主体に対峙して現れる対象としての在り方」と言うとき、形容詞〈gegenständlich〉が、「具象的な、具体的な」という意味をも合わせ持つことに注目したい。客体・対象が主体・人間に対して、その有する属性・性能・性質を、如何なる「具体的・具象的」な形で表現するか、が問題の焦点である。

「商品は、使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである」（S.75; 1－115頁）。その商品の「使用価値または使用対象」の有する属性・性能・性質は、現物を見れば捉え得る。しかし、「商品の価値対象性には一分子も自然素材は入っていないので、或る一つの商品をどんなにひねくり回してみても、価値物としては相変わらず捉えようがないのである」。という次第で、「価値」の有する属性・性能・性質は、現物を見ていただけでは捉え得ない。捉え得るためには、「価値対象性は商品と商品の社会的関係のうちにしか現れない」のだから「この価値の現象形態に帰らなければならない」（S.62; 1－93頁）。「その価値が商品の現物形態とは違った独特の現象形態、すなわち交換価値という現象形態を持つとき」（S.75; 1－115頁）、すなわち価値形態において、特にその最終形態としての貨幣形態＝価格においてこそ捉え得るである。

「価値形態または交換価値」において、商品価値の有する「交換可能性・交換力・購買力・引力」が「具体的・具象的」な形で現れる、というときに、「価値」と「価値対象性」の差はどこにあるか。「価値」は「交換可能性・交換力・購買力・引力」である。それに対して、「価値」＝「交換可能性・交換力・購買力・引力」の現れ方・現象形態（その名称が「価値形態または交換価値」）を含めて、「価値」の主体に対する在り方・現れ方を示す概念が「価値対象性」である、と言えよう[51)]。

〔九州大学名誉教授〕

51）この論点について詳細は、拙稿「『資本論』の沙翁引用 ── 価値対象性という概念」（九州大学『経済学研究』第85巻第２・３合併号、67～87頁）参照。